



茨城出身の萩谷は 1986 年生まれ、2010 年茨城大学大学院教育学研究科美術教育専修修了、在学中から茨城県で作品を発表し、東京における初個展となる。萩谷は大小様々な油彩を 19 点、展示した。

作品の大きさは関係ない。漆黒の画面に同じ動物が群れを成す。若しくは、生き物がいない風景が連続される。いずれにしても、人間は登場しない。人工物も描かれない。淡々と、人間のいない世界が描かれている。

どこか人間の行為を想起させる。描かれる風景と動物の慣例や習性をリアリズムの手法を用いて克明に描くのもなく、擬人化でも決してない。だからこそ、人間の存在の違和感を浮彫にするのである。

それは P・ブリューゲルや加山又造の作品を想起す。ブリューゲルはマクロからミクロではなく、ミクロからマクロを創造した。加山は描かれる対象と見る者の、遠い距離の隔たりを示した。萩谷はそのどちらでもない。実際の風景でも空想上の光景でもなく、中から外、外から内へとという視点すら存在しない。何が描かれているのか。



ヒントは仄暗い画面の色彩にある。吸い込まれるような漆黒や、目が眩む光はここに存在しない。網膜にヴェールが掛けられて、現実にも背を向けさせるために惑わそうとしているのでもない。

「良く見ること」。ここに萩谷の作品の面白さがある。我々は本来、発光しないものに目を投じる。描かれた絵画は勿論、書物、人間、自然物は自ら光らない。発光するものでも、太陽の光には打ち消されてしまう。

その筈がどうだろう、テレビやパソコンは発光して広告を訴えかけてくる。街は勿論、駅、車内にまでモニターは追いかけてきて、果ては電話にもモニターが装備されている。夜中にスマホを見る人の顔が般若に見える。

萩谷の油彩画は発光しない。すると、絵を見ることは何かといった当たり前のことを教えてくれる。描かれている世界を追うと、事物の位置が明らかとなる。生きる物の営みと言い換えてもいい。そこに、哲学的弁証が不在であることも画面に集中できる。絵とは何か、描くとは何か。描かれるとは何か。前提を反芻するのだ。

